
CAGE - 籠の中の記憶探偵 -

白城海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CAGE - 籠の中の記憶探偵 -

【Nコード】

N9023Y

【作者名】

白城海

【あらすじ】

「人が 死んでる？」

ある日学校で死体を発見してしまう主人公、天海慶次。
震える彼に向かい、幼馴染の風間祈衣は宣言する。

「高校生探偵の出番ね！」

そつ言いながら携帯電話を取り出し通報する祈衣。

「通報かよ！？探偵はどこに行った！探偵はッッ！」

自称高校生探偵の幼馴染。主人公にベタボレの中二病の後輩。毒を吐くけど兄思いの妹。変態でブラコンの兄。

そんな奴らとのドタバタの日常に紛れ込んできた《非日常》

死体発見の日から相次ぐ闇討ち。話を聞いてくれない警察。そして、巻き込まれ傷ついた後輩。

何故彼は狙われるのか。

そのカギは 彼の《記憶障害》の中にあつた。

天海慶次の記憶を巡るバトル・ミステリ&ラブ・コメディ（?）。

ここに開幕！

第一話 俺と死体と女子高生探偵

「六月四日。十六時三十分。 私立平坂高校 音楽室」

唐突だが聞いてほしい。

『音楽室の扉を開いたら人が死んでいた』。

目の前の出来事に俺 天海慶次は心の奥底から恐怖し、絶句していた。

六月初旬とは思えないほどの暑さ。

吐きそうなほどの熱気。

体中に張り付く湿気。

普段なら地球に向かって文句の一つも言ってやりたい程の不快指数。

体の至る所から汗が噴き出すのを感じる。

それは冷たい汗 恐怖からの、汗。

手が震え、寒気が全身を覆う。

まずは目を疑い、次に正気を疑った。百人が百人とも俺と同じく無様な姿を晒すはずだ。

「夢、だ。夢を見てるんだよ。俺は」

ゆっくりと目を閉じ、そして開く。

目に映るのは天井から延びたロープ。そしてだらしなく垂れ下がった男の四肢。

もちろん床に足を着いていない。首の骨が折れているのだろうか、死体は奇妙な角度で首を垂れ、上目づかいとも言えるような顔を俺の方に向けていた。

コイツは夢じゃない。間違いなく現実だ。

「はは…は」

現実から逃れようとする乾いた笑いも、死体と目が合い止まってしまう。

今にも眼窩^{がんか}からはみ出しそうに飛び出た、それでいて暗く光の無い瞳が俺をじっと見つめているかのように見えた。

すぐにでも逃げ出したいのに床に張りついたかのように足が動かない。

すぐにでも目を逸らしたいのにまるで自分が死体になってしまったかのように首が動かない。

このまま死体に魂を引きずられ俺も死んでしまうのではないだろうか。混乱が妄想を呼び、妄想が錯乱を引き出し、意識が遠くなる。

その時だった。

「どうしたの、ケージ？」

聞きなれた女の声が引き金となり、ようやく俺の体が硬直から

解き放たれた。ただし抜け出せたのは首だけだったが。

後ろを振り返ると見慣れた女の顔。《風間祈衣》だ。

小顔で化粧気が薄く、色白で整った顔立ち。快活さを象徴するかのようにぴんと外側に跳ねたミディアムロングの癖っ毛。猫を思わせるやや釣り上った大きな瞳。その瞳が俺の顔をじっと覗き込んでいた。

「人が……死んでるんだよ」

教室の死体を指差し、伝える。手が震えているのが自分でも分かった。

俺が指を向けた方向を風間が見る。一瞬、目を見開き絶句。常識的な反応だ。

だが、彼女が続けた言葉は常識的とは正反対のものだった。

「困ったわね。このままじゃ練習できないわ」

「そう言う問題か!？」

思わず叫ぶ。変わり者だと言う事には気付いていたがここまでとは思わなかった。

「冗談冗談。分かってるわよ。高校生探偵の出番って言いたいんじゃない?」

風間が現実離れた奇妙な発言をする。

高校生探偵。

風間祈衣と言う女はミステリやサスペンスものが大好きで、ことあるごとに探偵を自称している。

事実、校内の出来事に限って言えば定期テストの順位から同級生の三角関係の内部事情まで完璧に把握しているらしい。俺に言わせれば探偵と言うよりはワイドショーだが。

「あたしのカンが言ってるの。この事件は殺人の可能性があるって」

とんでもない発言だった。それも真顔で、真剣に。俺の瞳を真っ直ぐに見据えて。

風間は思いつきをそのままノリと勢いで口に出す女だが、今回はかりは冗談ではなさそうだった。

「可能性って事は、自殺じゃないかもって事か？」

「そう、これは音楽部創立以来の天才ボーカリストであり、高校生探偵であるあたしの出番に違いないわ。推理漫画の王道よ」

首吊り死体を指差し、風間が嬉しそうに声を弾ませた。

「はあ、仕方ないな。期待してやるよ。お前の実力って奴に」

「任せて！あたしの歌で世界を変えてみせるわ！アタシの歌を聞けえっ！」

「そっちは欠片も期待して無えよバカ！探偵の方だ、探偵の方！」

思い付きをそのまま口に出しただけだった。コイツは俺の想像を裏切る事が趣味なのか。

「仕方ないわねー。じゃあ、まずさしあたってする事、それは」

風間がおもむろにポケットから携帯電話を取り出し、キーを操作する。現場を画像に残すつもりなのだろうか。

慎重な操作。そばで見ている俺にさえ緊張感が伝わってくる。
一体何をするのだろうか。

長いようで短い時間。

俺の視線を気にしてかせずか、風間はおもむろに携帯電話を耳にあてた。

「あ、もしもし。警察ですか？高校に死体があるんですけど…はい、場所は」

「通報かよ！？高校生探偵はどこに行った！常識すぎて予想外だよ
チクショウ！」

「市民の義務じゃない。何を言ってるの？」

「探偵だったら推理しろ！」

「警察に任せた方が確実だし？通報は趣味みたいなものだし」

ウサ美ちゃんかお前は。

「それに、別に推理しなくても死ぬわけでもないし」

「いつそ死ねよ」

「それに、電話中なんだから邪魔しないでよ。警察の人困ってるじゃない」

「俺のせいかな？俺のせいなのか！？」

理不尽だ。あまりにも理不尽だ。

「……ったく。いつもいつもバカみたいなことばかり言いやがって
少しは俺のストレスをだな」

「でもさ」

ぶつぶつと呟く俺の愚痴を、通報を終えた風間が遮った。

「震え、止まったわよね？」

にこり、と俺を瞳を覗きこみ微笑む風間。
そう、彼女の言った通り、いつの間にか俺の体の震えは収まっていた。

「はあ」と嘆息し諸手を挙げての降参する俺。
そんな俺を見て、妙に勝ち誇った顔が癪に障ったのでとりあえず「死ね」と罵倒しておいた。

第一話 俺と死体と女子高生探偵（2）

「警察が来るまで少し時間がかかるみたいよ」

携帯電話を閉じた風間が俺に向かい言った。声色には怯えも動揺も感じられない。つくづく大物だと思う。でなければ突き抜けた馬鹿だ。

「警察が来る前にやることがあるの」

「やること？」

確かにそうだ。職員室に教師を呼びに行かないといけない。それに、野次馬が来ないように見張りも必要だろう。いくら人通りの少ない放課後の音楽室と言えど、誰も通らないとは言い難い。

「意外と考えてるんだな。で、お前は何かからするんだ？」

「もちろん死体の観察よ！殺人事件なんて初めてだからよく見ておがなくちゃ」

「お前が野次馬かよっ！死者を冒瀆しやがって！」

「そんなつもりは無いわよ！」

怒鳴る俺。怒鳴り返す風間。冒瀆するつもりはないと言いつつ携帯電話のカメラで写真を撮っているのは何故だ。

「完全に興味本位の野次馬じゃねえか…」

頭を抱える俺をよそに、風間はひたすらに死体を観察し写真を撮り続けていた。

職員室に行こうとも思ったが、今の風間の姿を誰かに見られたらとてつもなく面倒な事になりそうなので見張りをする事に決める。

殺人の共犯者が俺は。

「本当にこんなヤツが俺の幼馴染なのか…？」

昔の俺に友人は選べと説教してやりたい気持ちになり深く嘆息。
すると今まで無言で死体を調べていた風間が口を開いた。

「見た所、自殺かな。服の乱れが無い。気になるのは衣類に付着した白い粉、かなあ」

「白い粉？」

「うん。何だろ、校舎の外壁の破片かしら」

「何でそんなモンが服につくんだよ」

ちらり、と一瞬だけ死体の方を見る。六月の暑さの中、何故か死体は長袖を着ていた。彼はどうして夏服を着なかったのだろうか。

「それを調べるのが警察の仕事じゃない。何言ってるの？」

「やかましいわ！この口だけ名探偵」

「口だけって。人の夢を馬鹿にするなんて最低ね」

「俺が最低ならお前は人間のクズだよ！死んで死体に詫びる馬鹿っ
！」

天井から垂れた物体を指差し、怒鳴る。見慣れない顔。何年生だろ
うか。

「ところで、こいつは誰なんだろうな？」

顔の広い風間なら知っているかもしれない。素直に疑問を口に出
す。すると風間は目を見開き、

「ケージったら、《忘れ》たの？隣のクラス、A組の梶原君よ。梶^{かじ}原^{わらま}正^{あき}明^{あき}」

呆れたような顔で言った。隣のクラス？聞き覚えが無いぞ。

「まさか？A組との体育は合同だ。それなのに顔も名前も思い出せない？そんな馬鹿な事」

ありえない。普通に考えればありえるわけが無い。

だが、俺は《普通》じゃない。思い当たるフシがあるのだ。汗が再び体中を覆う。

同級生、それも隣のクラスの生徒を見て顔も名前も出てこない。そんな《異常》が、俺にはありえるのだ。

混乱し、目を白黒させる俺に構わず風間が言葉を続ける。それは、余りにも衝撃的な言葉。常識外れの言葉。

「それどころか、あたしとケージは梶原君の話をしたわよ？今日、昼休みに」

「え？」

今度は……何を《忘れ》たん……だ？

トドメのように放たれた彼女の言葉に俺は目の前の死体の事も忘れ、呆然と立ち尽くすしかなかった。

- - - - -

「六月四日 午後九時三十分 天海家」

警察の事情聴取は思っていたよりあっさりしたものだっただ。

ドラマで見たような《第一発見者が犯人扱い》などと言う事もなく穏やかに終える事が出来た。

梶原正明を《忘れ》ている事も、風間や担任が《事情》を説明してくれたため問題にはならなかった。

「それでは、また署に来てもらう事になると思いますので」
「分かりました」

私服警官の言葉に頷き、覆面パトカーから降りる。風間とは警察署前で別れた。

あみしまえき
網島駅から徒歩十分。二階建ての白い一軒家。それが俺の家だ。リビングに明かりが灯っている。両親とは連絡が取れなかったので、家に居るのは妹だろう。

「ただいま」
「おかえりなさい。遅かったですね」

リビングに入った瞬間、キッチンでお茶を淹れていた妹の美鳥^{みどり}が満面の笑顔で振りかえった。

ほっそりとしたシルエット。背中まで伸びたさらさらで瑞々しい黒髪。

時には小学生にも間違われるほどの童顔。
大きな瞳に長い睫毛をぱちぱちとさせ家族の帰宅に喜ぶ姿はまる

で小動物の様。

顔つきと雰囲気のせいか、年齢にそぐわないクマのキャラクターで揃えられたエプロンとスリッパがが妙に似合っている。

この様子を見てこいつが一応高校生。俺と同じ学校の一年生だと言っても誰も信じないだろう。

「ちよつと色々あつて」

「色々？」

二人分の冷茶をトレーに載せ、テーブルへ向かう妹が疑問の声を上げた。

「ちよつと警察署に行つてさ。無茶苦茶疲れたんだよ。聞いてなかったか？」

鞆を床に放り投げ、椅子に腰かけ、そのままダイニングテーブルに突つ伏す。自室に荷物を置いて制服から着替える気力は残っていなかった。

「…つて、あれ？」

美鳥からの返事が無い。

不審に思い、伏せていた顔を上げる。

目の前には彫像のように微動だにしない姉がトレーを持ったまま固まっていた。

がしゅん。

直後、ガラスが砕ける派手な音が室内に響いた。
トレーに載せていたガラスが滑り落ちたのだ。

「どうした！大丈夫か？」

飛び散ったガラスの破片を確認する。ガラスは描かれていたキャラクターの原型を残さない程に無残に飛び散っていた。

確か、このガラスは妹自身が大切にしているはずのガラスだ。

俺が修学旅行の時に、デイズニールランドで買って来たお土産だったと記憶している。

少し値が張ったが、ミッキーマウスが大きく印刷されたこのガラスを妹は非常に気に入っていた。

その宝物の様に大事にしていたガラスを落とし、割ってしまうほどの衝撃が俺の言葉の中にあっただろうか。

考えても埒が明かない。頭を振り、慌てて椅子から立ち上がり駆け寄る。

幸いにも彼女に怪我はなさそうだ。

だが、様子がおかしい。美鳥は床に崩れ落ち、青ざめた表情で小刻みに震えていた。

「兄さん……」

「どうしたんだ急に。具合でも悪いのか？」

倒れこもうとする美鳥を抱きとめる。床にはガラスの破片が散らばり危険極まりない。

呼吸を調べる。怯えるような荒い呼吸。心に不安がよぎる。

だが、次の瞬間に妹が放った言葉は予想外にも程があるものだった。

「…自首しましょう。私が一緒に付いていきますから」

心配して損した。

「何でだよ！？警察から帰ってきたって言ったのに、どうしてソコから自首になるんだ！」

「逃げてきたんですね。大丈夫です。例え兄さんが最低の犯罪者だったとしても私だけは兄さんの味方ですから」

「問答無用で犯罪者扱いしてる時点で味方もクソも無いだろうがっ」
「そ、そんなに怒るって事は」

ようやく納得してくれたのか、涙を止め顔を上げる美鳥。どうやら誤解は解けたようだ。

「…本当に何か悪い事をしたんですね。人間は凶星を突かれると怒るって聞きますし」

「どうしてそうなるんだアアア！！」

結局、美鳥の誤解を解き終えるまでに、俺は十分以上の時間を費やす事になったのだった。

- - - - -

「に、兄さんは何もしていないんですか？」

リビングのソファーに並んで説得すること約10分。

ようやく美鳥が俺の話信じてくれた。

「当たり前だろ」

「《忘れ》てるだけじゃなくて？」

真顔で見つめ、尋ねる美鳥。
ずきり、と胸が痛む。

《忘れる》。胸に刺さるその言葉を無理矢理に振り払い、笑顔を作り答える。

「いくら俺の物忘れがひどくても、それが原因で警察沙汰なんてありえないだろ？」

常識でモノを考えてほしい。

たかだか物忘れで警察沙汰なんて起きるわけ

「先週、母さんが兄さんの身柄を警察署に引き取りに行きましたけど？」

「覚えてないな」

本当は覚えてるけどな。

だが、そんな嘘は美鳥に通じるはずもなく…

「その顔は覚えてますよね！またケンカですか？」

一瞬で見透かされてしまった。さすが家族と言っべきなのだろうか。

「また…っってお前。俺が年がら年中ケンカしてるみたいな物言いは止めるよ」

「それはそうですけど…。やっぱり心配ですよ」

顔を伏せ、今にも泣き出しそうな表情になる美鳥。

心配なのは俺の身の事だろうか。

それとも、俺の《障害》の事だろうか。だが、どちらにせよ

「慣れるしかないだろ。どうしようもないんだから」

諭すように良い、頭を撫でる。そう、慣れるしかないのだ。

「うう、そうですけど…。でも、ケンカじゃないならどうして警察に？」

目をぬぐいながら美鳥が俺に問いかける。

「ああ、それは人が死ん」

「自首しよう」

何でだよ。

「だから真顔は止めろっ！せめて全部言わせろ…ってオイ！電話を取り出すな！110番通謀しようとするな！お前は風間か！？」

携帯電話を取り出した美鳥の腕を体ごと抑え込む。

「に、兄さん。ちょっと…」

美鳥が慌てたような声を出す。

お互いの息遣いが届く距離だった。

何を意識しているのだろうか。兄妹だと言うのに。年頃の女子の考える事は分からない。

慌てふためく妹から携帯電話を奪い取り、距離を取る。

通報が無理だと悟ったのか、ようやく落ち着きを取り戻し美鳥が口を開く。

「だって、兄さんがとうとう人を殺すだなんて」

「殺してない！自殺だ…と思う」

自信は無い。だが、警官の話では恐らく自殺ではないかとのことだった。

もちろん、警官の言葉が俺達を安心させるための《優しいウソ》と言う可能性もあるのだが。

「本当に、本当に、ですか？」

「本当だ。俺は無関係だ」

じっと、見つめ合う。

美鳥は少しでも想像力が豊かすぎる少女だ。

その為、色々とすぐに誤解してしまう性格だがそれも全て俺の事を心配しての事だろう。

5秒：10秒。

長いようで短い沈黙の後、ようやく美鳥が口を開いた。

「…自分で殺したのを《忘れ》ただけだったりして」

おい。

「お前酷過ぎない？」

「兄さんの妹ですから」

「何も言い返せない」

前言撤回。

コイツは俺を心配しているんじゃない、多分俺で遊んでいる。

「だから話を聞けつての！」

近所迷惑も考えず、渾身の叫び声を上げる俺。

美鳥に全ての事情を説明し終えたのは、さらに20分の時間を必要としたのだった。

第一話 俺と死体と女子高生探偵（3）

「と、言う訳で事情聴取されてたんだよ」

ようやく落ち着いた美鳥に今日の出来事を説明する。

音楽室で風間祈衣と一緒に死体を発見した事。

その死体が隣のクラスの男子だった事。

俺と死んだ彼とは面識が無い事。

彼の事を《忘れ》ていた事は伏せた。不要な心配をさせてしまう
と思ったからだ。

「良かった。本当に…良かった」

全てを説明し終えた時、どう言う訳か美鳥は涙で顔をくしゃくしゃにしていた。

「変な事件に巻き込まれたりはしてなかったんですね！誰も傷ついたりしてなかったんですね」

その顔を見て、彼女が本当に心配してくれていた事に気づく。

「兄さん…《事故の後遺症》のせいで何度も酷い目に会ってるから

…」

「泣く程の事だよ。ほら、涙拭けっ」

床に転がっていた箱からティッシュを取り出し、涙を拭いてやる。
美鳥が抵抗することはなかった。

「家族が家族の心配をして何が悪いんですか…」

三枚目のティッシュで鼻をかみながら半目で呟く。
高校生にしては余りにも子供っぽすぎる仕草。だが俺は仕方がないと思う。

厳しくするべき父親は製薬メーカーの研究者で家に居つかず、母親も大手居酒屋チェーンの管理職で帰宅は深夜から明け方。

年の離れた兄の大鷹^{ひろたか}が俺達の親代わりのような物だったが、彼は数年前に医者となり、多忙な日々を送っている。

つまり、基本的に家では二人きり。恐らく、美鳥は家族の《愛情》に飢えているのだ。

俺は俺で甘え癖の抜けない妹をどうすればいいのか分からず、小さい頃と同じように面倒をみる。

自然と甘ったれの子供っぽい女子高生が出来あがる、と言う訳だ。これでも学校では成績優秀な生徒会役員だと言うのだから信じられない。

「ったく。泣くほど心配するようなことでも無いだろ？どれだけ信用ないんだよ。俺は。それに、面倒を見ているのは俺の方」

「週に1回誰かに殴られるようなあざを作り、月に1回学校から両親に呼び出しがかかり、3ヶ月に一回少年課のお世話になるような兄を心配しない方が無理です」

「すいませんでした」

やはり迷惑をかけているのは俺の方かもしれない。

少しでも普段の行いを反省し、俺は甘えん坊の妹のご機嫌をとる事に集中することにした。

これから《何が起きる》かと言う事も知らずに。

- - - - -
午前二時十八分 天海家二階 天海慶二の自室

ふと、目が覚める。

覚醒の原因は《物音》。鍵を開ける音だった。恐らく兄が帰ってきたのだらう。

出迎えても良いが、深夜に俺を起こした事を気に病むかと思い、そのまま目を閉じる。

俺がいるのは二階。リビングは一階。このまま寝てしまえば兄は俺を起こした事に気付かないでいられるだらう。

だが、俺の予想に反して足音は近づいてきた。

ぎしり、ぎしりと階段を踏みしめる音。足音を忍ばせようと努力はしているようだが隠しきれるものではない。

階段を踏む音は床を踏む音へと変わり、ゆっくりと近づいてくる。

そう、俺の部屋へと。

不安が、胸をよぎる。

家族が寝ている俺を起こすことなどあり得ない。それだけの《理由》があるからだ。

つまり、足音の主は《家族以外の誰か》。

さもなくば《俺を起こすだけの事情》があると言ったことだ。

嫌な予感がする。いや、嫌な予感しかない。

不審者の可能性も考えていつでも布団から飛び出せるよう身構えた瞬間。

「起きてる？」

兄の大鷹の、吐息のように抑えた声が俺の耳に入った。

不審者では無いと言うことは《何か起きた》と言う事。

「大丈夫。起きてたよ」

下手糞な嘘だな、と思う。思い切り寝起きの声だ。

「すまない。入っても良いかな？」

少し高めの、優しいテノール。聞きなれた兄の声。

だが、その声音には深夜に弟を起こしてしまっただけとは思えないほどの想い感情が込められていた。

嫌な予感がさらに膨れる。

「そんな暗い声出すなって。入れよ」

自身の想像を吹き飛ばすかのように明るい声を絞り出す。

一拍置いた後、ドアが開いた。廊下の明かりでうつすらと照らされた中背の男の姿が見える。

医者の不摂生とも言っただろうか。また少し痩せた気がする。

「電気、点けるよ？」

「ああ」

俺の返事を聞くまでもなく兄が蛍光灯のスイッチを押す。

部屋が白い光で満ち、兄の姿をはっきりと映し出す。

切れ長の瞳を細長い縁《ふち》なしの丸眼鏡で覆い、鬱陶しそうな長髪を真ん中で分けた見慣れた顔。

その表情には、明らかに疲労と困憊の様子が見て取れた。

「死体を見つけたってね？」

思った通りだった。兄が俺に伝えたい事は学校での死体に関する事。

「やっぱり知ってたのか」

兄の職業なら、俺達が死体を発見した事を知っていてもおかしくない。

「隣のクラスの奴らしいぜ。俺には関係ないけどな」

先ほどよりもさらに無理矢理に明るい声を絞り出そうとする。だが、無理だった。俺の声は震えていたのだ。

しばらくの沈黙。

兄はどう告げれば良いか迷っているようだった。

だが、俺には分かる。彼が何を言いたいのか。だってそうだろう？

《検死医の兄》が《自殺か他殺か分からない死体を発見した弟》を深夜に起こしてまで言わなければならない事は
たった一つしかない。

「少し、覚悟してほしい」

沈黙を突き破り、兄が告げた。

俺がうなずくのを待ち、続ける。

「彼は…梶原正明君は……」

大丈夫。もう覚悟はできている。

「自殺じゃない……可能性がある」

予想通りの言葉。だが、それはつまり

俺の通っている学校に

殺人犯がいる。

そう言う意味だった。

>> 第一話 俺と死体と女子高生探偵 終

第二話 俺と兄妹と脳障害

「どう言う、事だよ」

予想通り。予想通りの展開だった。

だがそれだけに俺の衝撃は大きかった。

だってそうだろう？

学校で殺人事件が起きたのだ。

《殺人事件》。つまり、犯人が存在すると言うこと。

それも、俺の学校の中に。

被害者は隣のクラスの生徒。

《隣のクラス》。つまり、俺の日常のすぐ側に殺人犯が居ると言うこと。

恐怖を感じるには十分すぎる理由だった。

「勘違いしないで欲しいんだ。まだ殺人事件って決まった訳じゃないから」

兄の落ち着いた声。

「さっき検視に付き合ったんだ。自殺じゃないけど殺人とも断定できない。それが今日《僕たち》が出した結論だよ」

どう言う意味だろうか。首吊りの死体が殺人でなければ何だと言うのだ。

兄は大学病院の医師だ。それも普通の医者では無い。

《検死医》。

兄はいわゆる、警察に協力する医者。

細かい事は知らないし、彼も話そうとしない。

守秘義務があるだろうし、犯罪にかかわる話を家族にはしたくないのだろう。

「兄貴が担当になったのか」

「うん、この辺の担当はうちの大学だからね。警察から呼ばれて行ってきたんだよ」

兄が言うには、検視には医師の立ち合いが必要らしく、県警から委託された医師と検察が協力して死体 兄が言うには遺体らしいが俺には違いが分からない を調べるらしい。

解剖せずとも、遺体の体温で死亡推定時刻は分かるし、自殺かそうでないかくらいは簡単に判断できるとの事だ。

「解剖はしていないから断定は出来ないけど、一つだけ確かな事がある」

「確かな事？」

「その前に慶次は《自殺》か《そうでないか》の違いは分かる？」

昼間に自称名探偵の風間が言っていた事を思い出す。

確か、あの時は《衣類の乱れがあるかどうか》と言っていた。

だが、その後《乱れなんて直してしまえば分からない》とも。

役に立たない名探偵だなオイ。

「さっぱり分かんね」
素直に降参する。

「簡単な話だよ。《争ったり抵抗したりした形跡はあるか》」
「ああ、なるほど」

確かに簡単な話だった。

首吊りに見せかけた絞殺ならばどうしても被害者は抵抗する。
紐を首から離そうともがけば手の痕が残るだろうし、犯人と揉み
合って血液だって飛び散るかもしれない。

他には、《首吊りと絞殺では首にかかる負荷が違いすぎる》との
ことだ。

言われてみれば納得できる。全体重が首にのしかかる力の方が、
紐が何かで力いっぱい締めつける力よりはるかに強い。

兄たちはその違いが調べただけで分かるらしい。

科学捜査万歳。現代日本に名探偵は必要ない。

「今回は抵抗などの形跡はなかったんだ。だから絞殺したのを偽装
するために首を吊らせた可能性はない」

「じゃあ、自殺じゃないのか？」

首吊り死体が他殺じゃなかったら、自殺の他に何だと言うのだ。
俺が当然の疑問を口にする。

すると、兄は困ったような顔をして。

「いや、事故と言うには余りにも不可解な事があってさ」と、言っ
た。

「不可解な事？」

「自殺にしては《首への負荷》が大きすぎるんだ」

「どう言う意味だよ？」

話をもったいぶるのは兄の悪い癖だ。俺は早く答えを聞きたいと言っのに。

「まるで、首を縄にかけたまま高所から突き落とされたような感じだね。首がヘシ折れてたんだよ」

「ヘシ…ってどういう意味…だよ」

「分からない。まだ捜査中だからね。今は鑑識さんがあらゆる証拠を集めている所。その辺に関してはあっちの方が専門家だよ。彼らは衣類に付着した髪の毛一本見逃さない。彼らが何かを見つけ出すのを信じるしかないって所」

「…」

「それで、話は戻るけど…さっき言った《確実なこと》。それは」

兄の表情が変わる。

泣きそうな、申し訳なさそうな、苦しそうな、心配で堪らないような顔。

「《彼が音楽室で首を吊ったと言うことは、考えられない》」

再び、沈黙。

俺は何を言えば良いのか分からず

兄は俺にどのような言葉をかければ良いのか分からないのだろう。

「…マジで殺人事件？」

沈黙に耐えられなくなり、俺が口を開いた。

「殺人かもしれないし、事故を隠蔽しようとしたのかもしれない。」

だけど、どちらにしても…」

言葉尻が小さくなっていく。

表情だけで言い辛い言葉だと言ったことが見てとれた。

だけど。言わなくても、もう分かっている。

だからこそ喉が渴く。違う。喉だけではなく、舌までがカラカラだ。

まるで、砂漠の真ん中に放り出されたかのように、体の内側から外側まで干からびているような感覚に襲われていた。俺の学校に、人殺しがいると言った事実。その事実に対しての恐怖と焦りから。

冗談みたいな話に思える。まるでマンガやドラマではないか。足が震えている気がする、気のせいだと思いたい。

だけど、兄貴には心配をかけたくなって…。
これ以上、家族に迷惑をかけたくなって…。

「俺の学校に犯人がいるって事だろ？大丈夫だって。気をつけるから」

俺は、強がる事にした。兄に続きを言わせず、俺が続きを言ったのだ。

俺の強がり気づいてか気づかずか、兄の顔に少しだけ明るさが戻る。

「あ、そうだ。普通は医者には詳しい捜査情報は滅多なことじゃ回って来ないんだけど、発見者が僕の弟だし、何かあったら大変だから」

らって事で特別に色々教えてもらえる事になったんだ」

兄の無理矢理に捻り出したような明るい話題に思わず苦笑してしまふ。

「心配しすぎだったの。何で死体を発見しただけで俺達に危険があるんだよ」

笑い飛ばしはしたが、本心を言うと殺人犯が同じ学校にいると言う事実は恐ろしいを通り越した物があるのだが、それは口にしない。

「だって、ホラ！ほら、お前が実は決定的瞬間を目撃していて、しかもソレを《忘れた》なんて言う事だったら！」

笑われた事がショックだったのか兄が反論する。

「それはない。今日は球技大会で基本的に誰かと一緒に行動してたしな。1人だった時間なんて15分もない」

今の言葉は事実。担任や風間、クラスメイトから証言が取れている。

だからこそ俺が被疑者扱いされることなく帰宅できたのだ。

「じ、じゃあ実は犯人が偏執的な殺人狂だったら！」

「だったら、とつくに誰か殺されてるだろ……」

「慶次は兄の僕から見ても惚れ惚れするくらいの美形だから狙われずもおかしくないよね！」

「『おかしくないよね！』じゃねえよつ。気持ち悪いわ！早く弟離れしろ！このブラコン！」

実はこの兄。過保護である。

両親が不在がちの我が家において、絶対の権力を持つ長男。

彼はその権力の全てを俺達を甘やかす事に注いだ。

お陰で美鳥はいまだに甘え癖が抜けず、俺は俺で弟・妹離れできない兄に辟易している。

「失礼な。僕はブラコンじゃない」

「じゃあ何なんだよ」

ブラコンでシスコンなんて言ったら殴ろつ。そつ心に誓つ。

「ブラコンでシスコぶべらっ！」

殴った。カー杯。

大げさにきりもみ回転しながら部屋の外まで吹き飛んでいくが気にしない。

医者だから大丈夫だろう。根拠はないが。

「三十路のオッサンが堂々とワケの分からん発言をするなっ！…と
もかく、俺も風間も大丈夫だから」

兄も美鳥も風間祈衣の存在は知っている。と言つより家族ぐるみの付き合いらしい。俺はよく知らないが。

「それでも…心配なんだよ。そう、心配な事が《多すぎる》」

いつの間にか部屋に舞い戻った兄が言った。シューティングゲームの残機かお前は。

「多すぎ…る？」

他にもまだあるのだろうか。今以上に心配な事が。

俺の不安を感じ取ったのか、今までになく深刻な表情で兄が口を開く。

「仕事はまだ残ってるのに抜けてきた。怒られちゃう」

俺の不安を返せ。

「『怒られちゃう』じゃねえよっ！お前は女子中学生かつ！いくら童顔でもオッサンが言っている事と悪い事があるぞッ！」

「オッサンって…酷いよ慶次」

「全然！欠片も！1ミリたりとも酷くないっ！事実だよ！いくら20代前半にしか見えなくともオッサンはオッサンだ！このモー娘世代！」

畳みかける様に言葉を叩きこむ。放っておくとすぐに調子に乗るので性質たちが悪い。

さすがに堪えたのか、急に真顔になる兄。

「どうしたんだよ。急に真剣な顔して」

「…事実と言うのは時に幻想よりも残酷な物だね」

「やかましい。何か名言っぽく言ってもオッサンはオッサンだからな。もうツツコンでられるか。俺は寝る」

ぴしゃり、と言い切り布団を被る。

しばらく兄は俺の方を見ていたようだったが、やがて部屋の電気が消え

「おやすみ。気をつけなよ。父さんも母さんも心配すると思うしさ」とだけ言ってドアを閉めた。

足音も遠くなり、後に残るのは暗闇と静寂。

「…全く。馬鹿なことばかり言いやがって」

だけど、その馬鹿のお陰で助かった。少しだけ、明るい気持ちになれた。

いつも思う。

良いモンだよな。家族って、と。

- - - - -
6月5日 午前7時 天海慶次 自室

スマートフォン
携帯電話に設定されたデフォルトのアラーム。

強烈な目ざまし時計のベル。

ステレオスピーカーから吐き出される大音量のロック・ミュージック。

全てが同時に俺の耳と脳に襲い、蹂躪し、俺は目を覚ました。
朝日が目に差し込み、思わず再び目を閉じる。
目もとが涙で薄っすらと濡れていた。何か悪い夢でも見たらしい。

「悪夢の方がまだマシだったんだけどな」

俺は今、悪夢より厄介な《現実》にいる。
殺人犯が近くにいる学校に行かなければならないという現実に。
昨晚、10時を回った頃に我が家に学校からの電話が届いた。
内容は《学校で事故があったので気をつけて登校するように》との事。

「馬鹿馬鹿しい。何でこんな日に学校に行かなきゃならないんだよ」
轟音が部屋を支配する中、ため息をつく。

が、何を言った所で現実が変わる訳でも無い。《2度と》留年は御免だ。

俺は起き上がろうと目を開いた。

まず目に入ってくるのは、天井にまるで封印の呪符のように貼ら

れた《単語》の羅列。

B5の印刷用紙に記された《日本語》《ひらがな》《カタカナ》《漢字》《ことば》《天海慶二》《あまみけいじ》その他様々な手書きの単語。

単語それぞれに繋がりはなく、子供にでも分かる言葉ばかりだ。不気味な事この上ないが、別に俺の趣味ではない。必要だから貼ってあるのだ。

「全部。意味は分かる。今日も問題無し」

全てに目を通し、確認を終えてから起き上がる。

起き上がってまず最初に見える物は壁。いや、《壁に張られた紙に描かれた文字》。

《机の上のノートを見る》

天井の文字の次は机のノートに目を通すのが俺の日課。いや、義務だ。

この義務を果たさないと大変な事になる。なぜなら

「兄さん！寝坊しちゃだめですよ…って、あれ。起きてたんですか」

目覚ましを止め忘れていたせいで、俺を起こしに来たのだろうか。部屋のドアが乱暴に開けられた。アラームやベル、音楽はいまだに部屋中を叩き、殴っている。

ドアを開けたのは黒髪の少女。中学生くらいだろうか。小柄で艶やかな黒髪と猫のような瞳が特徴的な少女だった。

少女と、目が合う。

「もう。起きてたんなら目ざましを止めてください。ご飯ですよ？」

拗ねる様に、責める様に、だが親しげに声をかけてくれる少女。

だが、俺には。

「ど、どうしたんですか？そんなに見つめて」

俺には。

「なあ。アンタ」

俺には

「一体」

俺には――！

「誰、なんだ？」

少女の顔に　全く、そう。

全く、見覚えが無かったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9023y/>

CAGE - 籠の中の記憶探偵 -

2011年11月27日22時03分発行